

Medical

くすり

がん細胞株と患者、薬剤反応異なる

データベース使った薬の開発に限界か

がん細胞株に関する米国のデータベース「CCLE」について、がん治療薬への反応を解析した結果、実際の患者のがん細胞とは反応が異なっていたと、京都大大学院などの研究グループが発表した。

CCLEは、患者から抽出したがん細胞を長期的に培養できる細胞株として登録・解析したデータベースで、世界中のがん研究に利用されている。研究グループは、CCLEに登録された1182種のがん細胞株を用い、卵巣がんや乳がんの原因とされる遺伝子の異常と治療薬への反応について検証した。

その結果、がん患者では治療薬に反応するとされる遺伝子異常が、CCLEでは逆に治療への抵抗性と関連していた。CCLE以外のデータベースを解析しても同様の結果だった。

研究グループは「データベースを用いたがん治療薬の開発には限界がある」と指摘している。(メディカルトリビューン=時事)

診療所は病院の3倍以上

抗菌薬使用量

抗菌薬の使用量を調べたところ、診療所は病院の3倍以上で、この大量使用が薬が効かない耐性大腸菌の発生に関連することが分かったと、国立感染症研究所などのグループが発表した。

薬剤耐性菌の増加は世界的な問題で、抗菌薬の適正使用による対策が急務となっている。

研究グループは、全国の診療所1万6484施設の検査データ、1947病院の院内感染対策データなどを分析し、2種類の抗菌薬(第3世代セファロスポリン系およびフルオロキノロン系)の使用量と、患者の血液から耐性大腸菌が検出される割合を比較した。

その結果、1日当たりの抗菌薬使用量は、病院と比べ診療所では3倍以上だった。2種の薬剤に耐性を示す大腸菌の割合も、病院の13.1%に対し診療所では18.7%と多かった。研究グループは「国家戦略として、診療所での不適切な抗菌薬使用の削減に取り組む必要がある」と警告している。(メディカルトリビューン=時事)

手術前後の追加投与による副作用リスク

免疫チェックポイント阻害薬

免疫の働きを活性化させ、がん細胞への攻撃を持続させる「免疫チェックポイント阻害薬(ICI)」を手術に追加投与する際の副作用リスクを明らかにしたと、横浜市立大付属病院などの研究グループが発表した。

固形がんの手術前または手術後のICI追加投与で、治療成績の改善が報告されている。しかし、追加に伴う副作用のリスクは十分に評価されていない。研究グループは、ICIに関する論文28本・1万6976人のデータを解析。手術前後のICI追加が治療に及ぼす影響を検討した。

その結果、全体ではICI追加と治療に関連する死亡の増加との有意な関連は認められなかった。投与のタイミング別に見ると、術後の追加は治療関連死亡や副作用の増加と関係していたが、術前の追加では関係がなかった。研究グループは「がん患者への情報提供に役立つ知見」とした上で、「副作用に注意して治療方針を判断するべきだ」としている。(メディカルトリビューン=時事)

普段見ているテレビの音量を上げるようになってきたら、それは耳の衰えの始まりとされる。聴覚の低下は認知症やうつ状態の引き金にもなるが、補聴器の使用、毎日の生活の見直しで老化を予防することができると、NPO法人日本食育協会(東京都渋谷区)元理事で管理栄養士、医学博士の本多京子さんに聞いた。

補聴器、食習慣改善で認知症予防



耳が衰えると情報量が減る

注意だ。家族との会話が減ったり、人と会うのがおっくうになったり、おっくうな状態や引きこもり、咽喉科を受診していただき

聴覚の衰えに注意 高齢者

健康

メディカル



必要に応じて補聴器を使うことも考えたい。近年は騒音がする場所でも補聴器の機能が向上している。補聴器を使うと認知機能の低下を抑制するとの報告もある。

「会話が聞き取れなくなり、人との付き合いも薄くなりがちです。操作方法を覚えやすい年齢のうちに補聴器を試してみるのがいいでしょう」と本多さんは助言する。血管の老化防止、食事や運動習慣などの生活習慣病がある、脳の血流が悪くなり、聴覚の機能に影響を及ぼすとされる。「血管を若々しく保つには、食習慣に気を付けることが重要です」(時事)

強い眠気 生活に支障

ご存じですか 特発性過眠症



特発性過眠症

夜、十分に眠ったはずなのに日中に強い眠気に襲われ眠ってしまう、学業や社会生活に支障を来す。そのような状態が3カ月以上続く病気が「特発性過眠症」だ。長崎大学病院(長崎市)総合診療科で睡眠・覚醒障害外来を担当する近藤英明医師は「子どもから高齢者まで、幅広い年齢層の患者がいます」と話す。

朝もつらい

過眠症の患者は1日11時間以上眠っていることが珍しくなく、それでも、朝なかなか起きられず、日中に居眠りを

起きられず、日中に居眠りを繰り返す。仮に1時間居眠したとしても、爽快感がないのです。病気の原因ははっきりしない。「病院を受診するのは中学生以上が多いです。子どもの頃から「よく寝る子」だったという話をよく聞きます。成長とともに勉強などで睡眠時間の確保が困難になると、日中の眠気で生活に支障を来します」

薬と睡眠習慣で

覚醒を維持する働きがある薬を朝飲むと、「日中は起きていられ、夜間の睡眠は確保できることが多い」。薬としても重要なのは、適切な睡眠の習慣だ。

「学生は夜遅くまで勉強せざるを得なかったり、スマートフォンで友だちとやりとりをしたりします。現代人は自

話題 安易な手術に待った

肛門皮垂

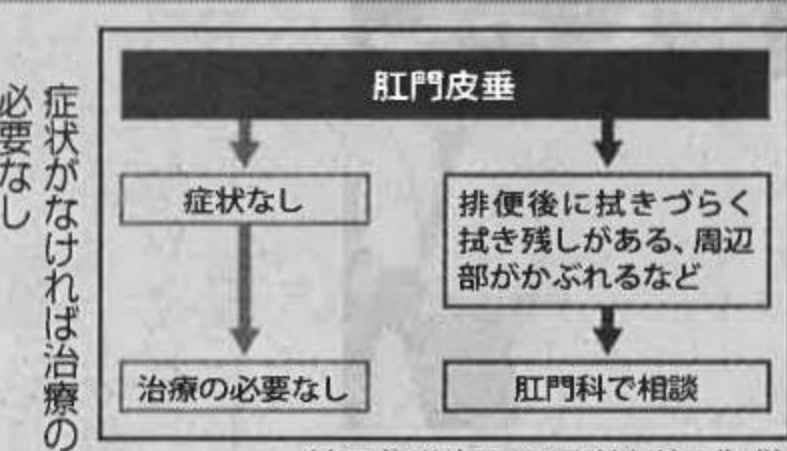
いぼ痔(じ)、痔核、や切れ痔(裂肛)などの名残として、腫れが引いた後に皮膚の余剰部分がたるとるんでしわになる「肛門皮垂(ひずり)」。スキントクとも呼ばれ、若い女性などがその見た目を気にして手術を求めるケースがあるという。寺田病院(東京都足立区)の寺田俊明院長は「安易に治療するべきではありません」と警鐘を鳴らしている。

病気ではない

支障があれば受診

便秘や出産でいきんだり、下痢を繰り返したりすることで肛門の静脈に強い負荷がかかるといういぼ痔や切れ痔になりやすい。

「いぼ痔の場合、肛門と直腸の境目にある歯状線(しじょうせん)より直腸側にできるのが内痔核、肛門側にできるのが外痔核。歯状線より直腸側は知覚神経がなく痛みを感じにくい一方、肛門側は痛みを感じやすいのが特徴です」。いぼ痔による肛門皮垂



(寺田俊明院長への取材を基に作成)

「症状がないケースでは、治療は自由診療で行われます。再び痔になれば、手術を繰り返すことにもなりかねません。赤ちゃんの頃のようなしわや皮垂のない肛門には戻りません。皮垂は生きてきた

「年輪」のようなもの。安易に治療を行うことはやめましょう」と、寺田院長は注意を呼び掛けている。(メディカルトリビューン=時事)

生活習慣病

早歩きで2型糖尿病リスク低下

早歩きを心掛けることで2型糖尿病のリスクが低下する可能性が示唆された、イランなどの研究グループが発表した。

その結果、2型糖尿病リスクは、ゆっくりとした歩行時速3.2km/h未満に比べ、一般的な歩行速度(同3.2~4.8km/h)で15%、やや早歩き(同4.8~6.4km/h)で24%、早歩き(同6.4km/h以上)で39%低かった。歩行速度の上昇とリスク低下の関連は、全体の身体活動量や1日の歩行時間を問わず認められたことから、研究グループは「歩く距離よりも速さが2型糖尿病リスク低下に関連する可能性がある」と述べている。(メディカルトリビューン=時事)

寺田病院の所在地 〒112-3-10873 東京都足立区扇1-20の12 電話0120(77)0874

長崎大学病院の所在地 〒852-8501 長崎市坂本1-7-1 電話095(819)7200(代表)